

第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能 —日本語学習者同士の自然談話の分析から—

高橋 美奈子
谷部 弘子
本田 明子

要 旨

母語話者と非母語話者によるインターアクション場面である接触場面の研究は、非母語話者の言語使用実態の把握に有効であると言われている。しかし、非母語話者同士の「第三者言語接触場面」において学習者がどのような言語行動を獲得するのかという観点からの実証的な研究は十分とは言えない。特に、コミュニケーションを円滑にするための多様な戦略として機能しているスピーチレベルシフトは、日本語学習者には習得が困難だと言われている。そこで、本稿では、学部レベルの国費留学生16名の日本語母語話者との会話および非母語話者との会話の2場面における自然談話データを用いて、第三者言語接触場面にみられるスピーチレベルシフトの機能のバリエーションを明らかにした。さらに、非母語話者であっても、相手との言語能力の差や親疎関係の差により、相手言語接触場面と第三者言語接触場面とは出現するスピーチレベルシフトの機能が異なる可能性も明らかになった。本稿では、日本語学習において第三者言語接触場面を活用する意義を指摘し、多様な日本語使用者による日本語談話の価値の問いなおしを試みた。

キーワード：第三者言語接触場面、スピーチレベルシフト、自然談話、日本語学習者

1. はじめに

近年、日本語教育において真の対話能力を獲得するためには、母語話者による談話の諸相を明らかにし、日本語教育にも取り入れることの必要性ならびに有効性が語られている(野田編2012)一方で、日本語使用機会の促進や会話参加者である学習者双方の主体的な場面参加者としての意識変化など、

日本語非母語話者間談話の意義も注目され始めている（ファン2011）。母語話者と非母語話者によるインターアクション場面は一般的に接触場面と呼ばれるが、ファン（1999、2006）は接触場面を「相手言語接触場面」、「第三者言語接触場面」、「共通言語接触場面」⁽¹⁾と3つに分類し、非母語話者同士の場面を特に「第三者言語接触場面」と名付けた。接触場面の研究は非母語話者の言語使用実態の把握に有効であるとされているが、「第三者言語接触場面」でどのような言語行動を獲得するのかという観点からの実証的な研究は十分とは言えない。

これまで、本研究グループでは、相手言語接触場面と合わせて第三者言語接触場面にみられる、対話能力に必要なストラテジーについて探索的に分析を進めてきた（本田・谷部・高橋2014、谷部・高橋・本田2015）。本稿では第三者言語接触場面にみられるスピーチレベルシフトの機能のバリエーションを明らかにする。

2. 研究方法

分析に使用したデータは、日本での留学期間が約1年間の短期留学生（以下、「学習者」）計16名の日常談話を文字化したデータと彼らの意識を明らかにするための半構造化インタビューによる調査結果である。16名の学習者には、日本語母語話者との相手言語接触場面の会話および非母語話者同士の第三者言語接触場面の会話の2場面を、来日後2か月以内および帰国前の1か月以内（来日後1年以内）にそれぞれ15～30分程度録音してもらった。インタビュー調査は、談話収集後に実施した。これらのデータをもとに、相手言語接触場面と第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能について分析する。

なお、学習者の日本語能力はおおむね中上級レベルである。また、収集した自然談話は学習者自らが会話の相手に依頼をしたので、初対面の相手との談話は皆無であり、すべて学習者の知り合いあるいは親しい友人との談話⁽²⁾である。

3. スピーチレベルシフトの多様な機能

「デスマス体」と「非デスマス体」に代表される日本語のスピーチスタイルは、話し手と聞き手との関係性（年齢、立場など）や場の改まり度による社会的制約だけで決定されるわけではなく、話し手の心的態度や談話の展開によっても意識的あるいは無意識的に選択されると言われている（生田・井出1983、宇佐美1995、三牧2013）。さらに、ある談話内で話者が設定したスピーチスタイルは談話内で固定されているわけではなく、「デスマス体」と「非デスマス体」が相互にシフトすることで、コミュニケーションを円滑に進めるための多様なストラテジーとして機能している。日本語母語話者によるスピーチレベルシフトは、心的距離の調節をあらゆる対人機能（相手との心的距離の拡大・短縮、相手の発話レベルに合わせることによる共感の表示、依頼や謝罪など聞き手目当ての発話での配慮表示など）や談話の展開を示す談話機能（新たな話題の導入、注釈・独話・補足の挿入、重要部分の強調など）として作用している（宇佐美1995、鈴木1997、三牧2013）。一方で、非母語話者だけに見られるシフトの要因には、特定の表現にあらわれる偏ったスピーチレベルの固定化（上仲2005）や適語探索（佐藤2000）があるといわれている。

このような複雑な機能を有するスピーチレベルシフトは、非母語話者による習得を困難にさせているという。ウォーカー（2011）はスピーチスタイルの習得は、学習者が日本語母語話者と対人関係をうまく構築できるかどうかに関わる重要な課題であるとして、指導の重要性を説いている。また、スピーチレベルシフトの習得を複雑にしている要因の一つとして、日本語母語話者が母語場面と接触場面で異なるスピーチレベルシフトを行っていることも指摘されている（伊集院2004）。しかしながら、接触場面における非母語話者のスピーチレベルシフトの実際をみると、スピーチレベルの使い分けの原則を指導しなくても、中上級レベルの学習者であれば、日本滞在中で無意識のうちに体験的に自然習得しているという研究報告もある（上仲1997）。ただし、これらの非母語話者によるスピーチレベルの使い分けに関わる研究は、すべて母語話者との接触場面であり、非母語話者同士の接触場

面ではない。

では、非母語話者同士の接触場面である第三者言語接触場面に着目する意義はどこにあるのか。多言語多文化社会に進みつつある現代において、日本語が第三者言語として使用される機会は益々増えることだろう。とりわけ日本語教育の教室場面では、大部分が学習者同士の第三者言語接触場面である。第三者言語接触場面は話者間の言語能力差が著しくなく、言語規範の制約が緩いという特徴を持つ（ファン2011）。それゆえ、相手言語接触場面には見られない積極的な会話参加の可能性も示唆される。

本稿では、約1年間日本に滞在する学習者を対象に、これまで明らかにされていない第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能について明らかにし、第三者言語接触場面の意義を再考する。

4. 結果と考察

本章では、まず学習者が各場面で主に用いるスピーチレベルを明らかにし、次に第三者言語接触場面で出現するスピーチレベルシフトの機能をとらえる。さらに、この機能と相手言語接触場面で出現する機能との違いを明らかにした上で、第三者言語接触場面の意義を再考する。

4.1 基本的なスピーチレベルの設定

基本的なスピーチレベルとは、特定の話者による全発話のうち最も頻度の高いスピーチレベルをさし、相手との関係性や場の改まり度などの社会的制約によって決定される（三牧2013）。次ページの表1は本調査における各場面での基本的なスピーチレベルの結果である。

両方の場面で来日時のスピーチレベルが「デスマス体」基調の学習者は同一人物であるが、「話す・聞く」力が他の学習者に比べて弱いことから、「非デスマス体」の習得が十分でないことが要因として考えられた。しかし、インタビュー調査で本人に「デスマス体」選択の理由を尋ねたところ、相手言語接触場面では日本語母語話者とは知り合ったばかりであること、第三者言語接触場面では相手が同国出身の年上であることを理由に挙げていた。この

ことから、「話す・聞く」力の弱い学習者であっても、「デスマス体」基調の選択が「非デスマス体」の未習得を示すわけではなく、戦略的にスピーチレベルを選択している可能性があることがわかった。

表1 各場面の話者による基本的なスピーチレベルの設定

| | | 学習者 (16人) | 談話の相手 (延べ人数) ⁽³⁾ |
|-------------------------|-----|--------------------------|-----------------------------|
| 相手言語接触場面 (相手：母語話者) | 来日時 | 非デスマス体 (15) デスマス体 (1) | 非デスマス体 (14) デスマス体 (2) |
| | 帰国時 | 非デスマス体 (16) | 非デスマス体 (16) |
| 第三者言語接触場面 (相手：非母語話者) | 来日時 | 非デスマス体 (15) デスマス体 (1) | 非デスマス体 (21) デスマス体 (1) |
| | 帰国時 | 非デスマス体 (15) デスマス体 (1) | 非デスマス体 (18) |

第三者言語接触場面の帰国時にも「デスマス体」基調の学習者が1人いるが、この談話も相手が同国出身の年上の話者であることによる。つまり、学習者は談話の相手が知り合いや親しい友人であれば、「非デスマス体」基調を選択しており、相手が母語話者か非母語話者かにかかわらず、相手との関係性によってスピーチレベルの選択をしていることがわかる。

4.2 第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能のバリエーション

本研究の談話資料における「第三者言語接触場面」でのスピーチレベルシフトには、前述した先行研究で挙げた母語話者が行うスピーチレベルシフトの機能と同様の多様な機能がみられた。以下に談話例をあげる。

なお、本稿でのスピーチレベルシフトとは、一時的な基本的スピーチレベルからのシフトで、同一話者の前後の発話間のシフトをさす。スピーチレベルシフトは、文末に限らず文中で出現する語レベルのシフトもあわせて分析する必要があるが、本稿では紙幅の都合により、文末スタイルのシフトに限定して論じる。また、表1で示したように、基本的スピーチレベルの大半が「非デスマス体」であることから、以下のスピーチレベルシフトは、「非デス

マス体」から「デスマス体」へのアップシフトの機能についてのみ言及する。

(1) 対人機能 1 一心的距離の短縮

談話例 1 は学習者 M と NNS1 (NNS: non-native speaker、日本語非母語話者) との談話である。両者とも母語は異なるが、同じヨーロッパ圏出身の学習者ということもあり、親しい間柄である。談話例 1 のやりとりは、約30分間の談話録音の終盤でのやりとりで、5行目で学習者 M が「非デスマス体」から「デスマス体」へシフトをしている。通常、学習者 M は NNS1 を名前の呼び捨てで呼んでいるが、ここでは、NNS1 の呼称に「様」をつけ、尊敬語「協力してくださって」や謙譲語「感謝しております」を用いて、「非デスマス体」から大げさなアップシフトをしている。これにより、ふざけや皮肉といった特殊な表現効果を示し、親密性を強調している。

談話例 1 : 対人機能 (心的距離の短縮) 【来日時】

| | | | |
|---|---|-------|---|
| | 1 | 学習者 M | じゃあ、そろそろ [談話の録音終了をさしている]。 |
| | 2 | NNS1 | うん。 |
| | 3 | NNS1 | 5、4、3、2、1。 |
| | 4 | 学習者 M | ありがとう。 |
| → | 5 | 学習者 M | <u>[NNS1 の名] さま、よく協力してくださって、感謝しております。</u> |
| | 6 | NNS1 | はいはい、5,000円。 |

* 句点「。」は一発話文の終了を示す。

(2) 対人機能 2 一心的距離の拡大

談話例 2 は韓国語を母語とする学習者 S と中国語を母語とする NNS2 が話している途中で、同じく中国語を母語とする NNS3 が、録音していることを知らずに会話に参加した場面である。学習者 S は中国語も理解できることから、普段、この三者は中国語で会話をしている。2行目では、「デスマス体」にシフトすることで、場の改まりを強調している。

談話例 2：対人機能（心的距離の拡大で場の改まりを強調）【来日時】

| | | | |
|---|---|------------|--------------------------------|
| | 1 | NNS3（途中参加） | うーん、##### [中国語で話す]。 |
| → | 2 | 学習者 S | 日本語で話してください。 |
| | 3 | 学習者 S | 日本語で。 |
| | 4 | NNS3（途中参加） | 何で？。 |
| | 5 | NNS2 | 今、やっているから [談話の録音中であることをさしている]。 |
| | 6 | 学習者 S | はははは<笑い>。 |
| | 7 | NNS3 | うそー。 |

* # は聴取不能な箇所 1 拍分、? は発話文が質問（問いかけ）、確認要求、疑いをあ
らわす疑問文であることを示す。

(3) 対人機能 3—共感の表示

談話例 3 は学習者 I と日本語能力が初級段階の NNS4 とのやりとりである。1 行目以前の談話では両者は「非デスマス体」でやりとりをしていたが、1 行目の NNS4 による「デスマス体」の質問を受け、2 行目で学習者 I は「すみません」と相手のスピーチレベルにあわせて返答している。その後、1 行目の問いに対する回答に至るまでの説明が何行か続くが、12 行目で、学習者 I は 1 行目の NNS4 に対する回答を「デスマス体」で NNS4 がわかりやすいように明確に行っている。相手のスピーチレベルにあわせることで、場を改まったものにしようとする相手の意図に共感を示している。

談話例 3：対人機能（共感の表示）【来日時】

| | | | |
|---|----|-------|--|
| | 1 | NNS4 | 運転した人は、★ [名 5] でしたか？。 |
| → | 2 | 学習者 I | →あ、運転←、運転、あ、 <u>すみません</u> 、勉強、勉強<笑い>。 |
| | 3 | NNS4 | 運転した。 |
| | 4 | 学習者 I | あの、うーん、あの、最後に、最初に、あの、[名 5] は、あー、運転、運転してみたけど、あの、できなかった。 |
| | 5 | NNS4 | でき★なかった？↑。 |
| | 6 | 学習者 I | →できなかったから←、あー、あの、[名 6]。 |
| | 7 | NNS4 | [名 6] ★、運転した？。 |
| | 8 | 学習者 I | → [名 6] さんは←運転した、そう。 |
| | 9 | NNS4 | オッケー、オッケー。 |
| | 10 | NNS4 | 琉大★まで運転した。 |

| | | | |
|---|----|-------|----------------------|
| | 11 | 学習者 I | →運転手、運転手←。 |
| → | 12 | 学習者 I | 運転手、運転手は [名 6] さんです。 |

*★は発話の途中で次の発話が始まった時点、→は前の話者の発話に重なった始まり時点、←は終わり時点、↑は目立った上昇イントネーションを示す。

(4) 対人機能 4—聞き手目当ての発話での配慮の表示

談話例 4 は談話例 3 と同じ二人のやりとりである。2 行目で、NNS4 は自分の言いたいことがなかなか日本語でうまく表現できず、少々声を荒らげる。4 行目で、学習者 I は、聞き手に向けた発話についてのみ「デスマス体」にシフトすることで相手への配慮を表示している。

談話例 4：対人機能（聞き手目当ての発話での配慮の表示）【来日時】

| | | | |
|---|---|-------|--|
| | 1 | 学習者 I | 昨日？。 |
| | 2 | NNS4 | いや昨日、ロンドワン [ゲームセンターのラウンドワンのこと]、えー、ロンドワン、その、そのことが、えー、ロンドワンにそのことがある。 |
| | 3 | NNS4 | でも昨日ロンド//。 |
| → | 4 | 学習者 I | <u>怒ら、怒らないでください</u> <笑い>。 |
| | 5 | NNS4 | <笑い>昨日、ロンドワン、えー、いなかった。 |

* // は発話の途中で次の話者の発話が始まり、「言いさし」で終わったことを示す。

(5) 談話機能 1—重要情報の強調

談話例 5 はヨーロッパの同じ国出身の二人のやりとりである。1 行目で、NNS5 がせっかく日本に留学に来たのに宿題に追われて友だちができないと言うと、学習者 N はサーフィンサークルを続けることで友だちを増やすと言う。特に、6 行目と 7 行目では、「デスマス体」にシフトすることで、友だちをつくるための自分の意思を強調し、決意表明の宣言として機能している。

談話例 5：談話機能（重要情報の強調）【来日時】

| | | | |
|---|---|-------|---|
| | 1 | NNS5 | あの、今のままはあの、宿題とかの勉強にいつも追われてて、あの友達は、友達づくりはあまり上手くー {うんうん [学習者 N]} いてないという {そうだね [学習者 N]} 状態になって、本当に、あの、なんか、★勉強しようがないなく笑い [複数] >。 |
| | 2 | 学習者 N | →だから←。 |
| | 3 | 学習者 N | だから、サーフィンサークル {<笑い [NNS5]>} 続けたい {<笑い [NNS5]>}。 |
| | 4 | 学習者 N | <u>サーフィンではなく、友達を増やすため、</u> |
| | 5 | NNS5 | うん。 |
| → | 6 | 学習者 N | <u>がんばります</u> <笑い [複数]>。 |
| → | 7 | 学習者 N | <u>毎日サーフィン行きます</u> <笑い [複数]>。 |

* 読点二つ「、、」は一発話文の途中であることを示し、{ } は発話途中の聞き手のあいづち、その中の [] はあいづちを打った話者を示す。

(6) 談話機能 2—新話題への移行

談話例 3、4 と同じ二人のやりとりである。4 行目の前までは、テスト前の勉強や宿題をしているかどうかについて「非デスマス体」で話していたが、4 行目で NNS4 が「デスマス体」にシフトすることで、昨晚何をしたかという新しい話題への移行を示している。

談話例 6：談話機能（新話題への移行）【来日時】

| | | | |
|---|---|-------|--|
| | 1 | NNS4 | でも、今は、今、漢字のテスト {うんうん [学習者 I]} のために、漢字のテストのために、勉強しなければならない。 |
| | 2 | 学習者 I | Ah ha (アーハ)。 |
| | 3 | NNS4 | ために、オッケー、ために、オッケー、わかった、わかった。 |
| → | 4 | NNS4 | <u>では、えー、昨日の晩、えー、何を★、えー、えー、しましたか？↑。</u> |
| | 5 | 学習者 I | →昨日の晩 [小さい声で] ←。 |
| | 6 | 学習者 I | わたし？↑。 |
| | 7 | NNS4 | はい。 |
| | 8 | 学習者 I | 昨日の晩？↑。 |
| | 9 | NNS4 | 昨日の晩。 |

(7) 談話機能 3—注釈・独話・補足の挿入

注釈・独話・補足の挿入としての談話機能は、一般的に聞き手目当て性が低いことからダウンシフトのときに現れる（上仲1997）。本データにおいてはアップシフトの例についてのみ分析していることから、この機能による出現数は非常に少なく、第三者言語接触場面では次の談話例7のNNS4による使用のみであった。

談話例7：談話機能（注釈・独話・補足の挿入）【来日時】

| | | | |
|---|---|-------|--|
| | 1 | NNS4 | えー、宜野湾の近くに、えー、[店名1] 知っているか？。 |
| | 2 | 学習者 I | 何？↑。 |
| | 3 | NNS4 | [店名1]、[店名1]、{うーん、いえ [学習者 I]} 知っているか？。 |
| | 4 | 学習者 I | 知っていない=。 |
| | 5 | NNS4 | =それは、遊び放題のところ。 |
| | 6 | 学習者 I | 遊び放題？。 |
| | 7 | NNS4 | はい。 |
| → | 8 | NNS4 | <u>えー、その場所で、えー、野球をしたり、えー、バイクを運転したり、えー、カラオケもあります。</u> |

* = は改行される発話と発話のあいだに間がないことを示す。

談話例7は上記の談話例3、4、6と同じ二人のやり取りである。遊び放題のところがどのような場所なのかの補足説明をするときに「デスマス体」へシフトしている。

これまで、初対面の相手言語接触場面を扱った上仲（1997）は、学習者も母語話者同様に対人機能の心的距離の短縮、談話機能の新話題への移行、補足・独話の挿入、確認のための繰り返しの機能を示すためにスピーチレベルシフトを行っていることを明らかにしているが、以上のように、第三者言語接触場面においても学習者による使用がみられた。

4.3 「相手言語接触場面」と「第三者言語接触場面」の比較考察

次に、「相手言語接触場面」と「第三者言語接触場面」とで出現するスピーチレベルシフトの機能がどのように異なるのかについて論じる。本データで

は、両場面の使用機能の種類が異なる学習者がいた。いずれも来日時の談話例であるが、顕著な事例を以下に挙げる。

表2の学習者Mは、場面による出現数の違いはないが、第三者言語接触場面では心的距離の短縮の機能が2例（うち1例は上掲の談話例1）ある。帰国時のインタビュー調査で、学習者Mに「母語を話すときと日本語を話すときで違いはあるか」と聞いたところ、「日本語は深く考えないと言葉がでなかったり、流暢に話せないので止まったりする。母語で話すときは、冗談やコメディが好きでふざけた感じになる。日本語は間違いをしないように真面目に考えて話している」と答えていた。しかし、談話例1のようなふざけといった表現効果を持つ機能の使用を見ると、第三者言語接触場面では、使用言語は日本語であっても、母語で話したときに近い感じで話すことが可能になるのではないだろうか。このような結果は、本研究のインタビュー調査結果を中心に論じた谷部（2015：45）で明らかにされた、「来日後の普通体習得には、同じ留学生として生活環境を共有し対等な関係を築きやすい非母語話者間の学習者場面が寄与しうる」という結果を裏付けるものとなっている。

表2 学習者M（ヨーロッパ・上級レベル）⁽⁴⁾

| | | 相手言語接触場面 | | 第三者言語接触場面 | |
|------|-----|----------|-------------|-----------|--------------|
| | | 学習者M | NS (同・普) | 学習者M | NNS (下・普) |
| 対人機能 | 短縮 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| | 拡大 | 1 | 2 | 0 | 1 |
| | 共感 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| | 配慮 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 談話機能 | 強調 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| | 新話題 | 1 | 3 | 0 | 0 |
| | 補足 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| その他 | | 0 | 0 | 0 | 0 |

* NS: native speaker、日本語母語話者

次の表3は学習者Iの各場面で出現した機能の種類を示したものである。

「第三者言語接触場面」では、「相手言語接触場面」と比べると、機能のバリエーションが豊富である。対話者である非母語話者も学習者 I 同様に、機能のバリエーションの種類が多い。

表3 学習者 I (ヨーロッパ・中級レベル)⁽⁵⁾

| | | 相手言語接触場面 | | 第三者言語接触場面 | |
|------|-----|----------|-------------|-----------|--------------|
| | | 学習者 I | NS (下・普) | 学習者 I | NNS (上・普) |
| 対人機能 | 短縮 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| | 拡大 | 3 | 0 | 3 | 1 |
| | 共感 | 0 | 0 | 2 | 1 |
| | 配慮 | 0 | 1 | 4 | 1 |
| 談話機能 | 強調 | 4 | 3 | 4 | 5 |
| | 新話題 | 0 | 0 | 1 | 4 |
| | 補足 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| その他 | | 0 | 0 | 0 | 0 |

一方、学習者 U は、今回の研究協力学習者の中で最も日本語力が高いが、スピーチレベルシフトの出現数は非常に少なく、いずれの場面も相手に合わせたシフトであった。相手言語接触場面では、共感で 1 例、その他（繰り返し・確認）で 1 例、第三者言語接触場面では、その他（次の 4.4 で述べる特定の表現の固定化）1 例が見られた。

談話例 8：対人機能（共感の表示）【相手言語接触場面・帰国時】

| | | | |
|---|----|-------|--------------------------------|
| | 1 | NS | ガソリン、久しぶりに入れるから、やり方忘れた。 |
| | 2 | NS | 待ってよ。 |
| | 3 | 学習者 U | あー、大丈夫大丈夫↑。 |
| | 4 | NS | [NS の名] ーのかばん。 |
| | 5 | NS | つ、あの一、ローソンまで寄っていいですか。 |
| | 6 | 学習者 U | はいはい。 |
| | 7 | NS | [NS の名] ご飯食べてから、車の中しゃべっていいですか。 |
| | 8 | NS | ご飯買ってからでいいですか。 |
| → | 9 | 学習者 U | はいはい、大丈夫ですよ。 |
| | 10 | NS | え、どうしようかな。 |

| | | |
|----|-------|----------------------|
| 11 | 学習者 U | うん、何かー //。 |
| 12 | NS | [学習者 U の名]、夕飯食べた？ ↑。 |
| 13 | 学習者 U | うん、まだ。 |

談話例 8 は NS (NS: native speaker、日本語母語話者) が運転する車中での談話である。NS は通常「非デスマス体」で話すが、録音を意識すると⁽⁶⁾、学習者 U への問いかけが「デスマス体」になる。学習者 U は 9 行目では、NS の「デスマス体」に合わせることによって、相手への礼儀を保っている。6 行目でも文体シフトはしていないが、NS の「デスマス体」に対して、語レベルで改まった「はいはい」という返答をしている。その後、12 行目で NS が「非デスマス体」で問いかけると、同じく「非デスマス体」で返答している。

以上、接触場面によってスピーチレベルシフトの機能が異なる顕著な事例をみてきたが、学習者 M や I のように第三者言語接触場面が多様な自己表出が自由にできる機会になり得る可能性も示唆された。

4.4 非母語話者特有のスピーチレベルシフト

最後に、本データにおいても、非母語話者特有のスピーチレベルシフトの機能、「適語探索」(佐藤 2000) や「特有の表現に現れるデスマス体の固有化」(上仲 2005) が見られた。適語探索の例では、活用に関わるもの(例: 「始める、める、うーん、始めます」)などが、表現の固有化の例としては、質問の「～ですか」(例: 「誰ですか」、「何ですか」)、確認・推量の「～でしょう」「～でしょ」(例: 「しゃべれるんでしょう?」、「私たちは 1 組でしょう?」)、意見表明の「～と思います」(例: 「スペイン語が、スペイン語が上手だと思います」)、あいさつや定型表現(例: 「お疲れ様でした」、「ありがとうございます」、「すみません」、「まだまだです」)、あいづち的発話(例: 「そうですね」)があった。

これらの表現は第三者言語接触場面だけに見られるわけではなく、相手言語接触場面でも見られることから、場面による影響はないと言える。しかし、

言語能力が高い学習者Uのように、相手の非母語話者性に合わせて、第三者言語接触場面だけに、この機能のシフトが見られた学習者もいた。伊集院(2004)では、母語話者が母語場面と接触場面で異なるスピーチレベルシフトを行っているとの指摘があるが、非母語話者についても相手言語接触場面と第三者言語接触場面とでは、異なる使い分けが行われている可能性が考えられる。しかし、この点について一般化するためには、今後さらなる研究が必要であろう。

5. まとめ

本調査から、「話す・聞く」力が弱い学習者であっても戦略的に基本的なスピーチレベルを設定していること、第三者言語接触場面であっても多様なシフトの機能を用いていることが明らかとなった。また、スピーチレベルシフトの機能のバリエーションは、相手言語接触場面と第三者言語接触場面とで異なる学習者もあり、相手との言語能力の差や親疎関係などによっても影響を受けることが示唆された。日本国外の日本語学習場面は、日本語母語話者との接触がない、第三者言語接触場面が主たる場である。同じ立場にある日本語非母語話者同士の関係性は、社会的な要因が固定的ではなく、相手との上下、親疎関係が多様である。さらに、日本語能力や日本文化に精通している度合いも異なる可能性があることから、固定的な言語ホスト-ゲストの関係にならないということが利点にもなり、逆に日本語能力の差が談話展開に影響する場合もあるなど、相手との関係の多様性が見込める。日本語学習には、このような第三者言語接触場面における活きた関係性を活用する学び方が必要とされるだろう。

本研究が日本語教育において、第三者言語接触場面を取り入れることの有効性的一端を実証し、多様な日本語使用者による日本語談話の価値を問いなおすことにつながることをのぞむ。

注

(1) ファン(1999, 2006)では、「相手言語接触場面」は「参加者のどちらかが相手

の言語を用いてインターアクションを取る場面]、「第三者言語接触場面」は「参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面]、「共通言語接触場面」は「接触場面でありながら参加者はそれぞれ自分の言語でインターアクションを取る場面」と定義されている。

- (2) 今回のデータは自然談話の収集を目的としていることから、談話内容や録音場所、時間帯、対話相手等の指定は調査者側からは行わず、学習者に任せた。よって、カフェテリアのような雑音が多い場所や車内、歩きながらなど、録音状況は様々である。原則、二者間談話を依頼したが、一部に三者間、四者間となった談話、あるいは二人で話している途中で意図しない別の話者による参加があった談話もあり、これらも採用した。
- (3) 談話の相手を延べ人数としているのは、注 (2) でも述べたように、学習者の対話相手は必ずしも一人ではないことによる。
- (4) 学習者 M の【帰国時談話】の各機能の数値は次の通りである (() 内数値は出現数)。

「相手言語接触場面」では、学習者 M (0)、NS (0)、「第三者言語接触場面」では、学習者 M (短縮 1)、NNS (0)。

- (5) 学習者 I の【帰国時談話】の各機能の数値は次の通りである。
「相手言語接触場面」では、学習者 I (拡大 2、配慮 1)、NS (拡大 2、強調 2)、「第三者言語接触場面」では、学習者 I (0)、NNS (強調 5、その他 2)。
- (6) 談話例 8 の前の車中でのやり取りの中で、NS は車から降りる前に IC レコーダーに向かって「今からガソリン入れます」と言った後に、「こんなんでもいいのかな。ま、もっかい [もう 1 回] 録ってもいいしね」という発話をしていることから、録音を意識して「デスマス体」を使っていることがわかる。

参考文献

- 生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12 pp. 77-84
大修館書店
- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6 (2) pp. 12-26

- 上仲淳 (1997) 「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト—日本語母語話者との比較考察—」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』 pp. 149–165 凡人社
- 上仲淳 (2005) 「日本語非母語話者に特有のスピーチレベルのシフト要因—中国語を母語とする上級日本語学習者の接触場面から—」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』 pp. 160–163
- ウォーカー, 泉 (2011) 『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育』スリーエーネットワーク
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『學苑』 662 pp. 27–42 昭和女子大学近代文化研究所
- 佐藤勢紀子 (2000) 『日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構』平成10年度～平成11年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究 (C) (2) (課題番号10680302)
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』 pp. 45–76 くろしお出版
- 野田尚史編 (2012) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版
- ファン, S.K. (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』 2 (1) pp. 37–48
- ファン, S.K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』アルク pp. 120–141
- ファン, S.K. (2011) 「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』 150 pp. 42–55 日本語教育学会
- 本田明子・谷部弘子・高橋美奈子 (2014) 「日本語母語話者との会話で何が学べるか—非日本語環境における学習者の日本語習得の特徴—」『シドニー日本語教育国際研究大会2014』 <https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program>
- 三牧陽子 (2013) 『ボライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- 谷部弘子 (2015) 「日本語のスピーチスタイルに対する学習者の意識—短期留学生へのインタビューから—」『ことば』 36 pp. 34–47 現代日本語研究会

谷部弘子・高橋美奈子・本田明子（2015）「日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか」『ヨーロッパ日本語教育20』（第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集2015）pp. 237-242

付記：本研究は、平成28～30年度科学研究費補助金基盤研究（C）「日本語学習者談話の有効性に関する研究」（課題番号16K02817、研究代表者 高橋美奈子）の助成を受けた研究成果の一部である。

また、本稿は、2016年日本語教育国際研究大会でのポスター発表「接触場面におけるスピーチスタイルの選択—学習者による自然談話の分析から—」（発表者：高橋美奈子・谷部弘子・本田明子、2016年9月10日発表）の内容を見直し、加筆修正をしたものである。

（たかはし みなこ：琉球大学）

（やべ ひろこ：東京学芸大学）

（ほんだ あきこ：立命館アジア太平洋大学）

（2017.11.14 受理）